

生命感的智慧とイギリス浪漫派詩人

三 谷 正

- (1) 序
- (2) 主体的人間に帰れ
- (3) 生命感的智慧
- (4) 缺けたるは——何
- (5) 宇宙の本質と浪漫派詩人
- (6) 結び

(1) 序

今日の社会は目覚ましい経済成長と華やかな物質文明の中にはあるが、その背後からは人間喪失とか、人間疎外とかいう悪魔に追われ、唆かされ、人間はただ物質慾にかられ、冷い争いに浮身を扮す暗い陰翳に鎖されている。これは今日の社会に何か欠けているからである。その欠けているものとは、今日の人々が人間の本質的なものを忘れていていることである。今日の人々は余りにも物、特に物の外面に囚われている。山や水など自然を見ても、自然の形骸にのみ囚われ過ぎている。人間を見ても、その形骸、外面的人間の姿のみに囚われている。今日の人々は、もっとその眼を、人間や物の内面に、人間や物の本質に向けるべきである。人間や物をただ無機的に見ないで有機的に見るべきである。本質の表現としての外面をもった人間や物、即ち本質の裏づけのある人間や物の内外全体を見るべきである。この人間や物の内外全体を見る、即ち人間や物を有機的に見る人間の能力を、わたくしは生命感的智慧といたいのである。この智慧は人間が生得的に人間の内心に持っているものではあるが、今日の人々からは忘れ去られているものである。これを再び今日の人に目覚まし、個々の知識は囚われ、理知の世界のみを最上とする人々に、理知と感情の釣合った、即ち理知に感情を加えた叡知の世界のあることを示したく、ここに生命感的智慧の検討をなし、且つはこの智慧を働かすことによって、人間的眞実、事物の本質追求の情感に生き、われわれに喜と幸福を示してくれたイギリス詩人の幾人かに触れて見たいのである。

(2) 主体的人間に帰れ

ロバート・ブラウニング <Robert Browning> に次の句がある。

「われ、進化せる獣たるの段階を
永久に脱し、
まことの人間と認められ、
たとえ芽ばえにすぎずとも、
神に近きものとして、
進み行かん。」

“Thence shall I pass, approved
A man, for aye removed
From the developed brute; a god though in the germ”

Robert Browning: Rabbi Ben Ezra st. 13.

と。この句は、今日の一般の人の眼を以て見れば、余りに宗教的、余りに道徳的の感があり、陳腐であり、古臭いとの非難を免れ得ないと思われるものである。今日の人々、特に若い人達に訴えるところの少いものである。しかし、われわれが一度眼を現実に向け、現実社会の諸相を見るとき、例えば、一国の要人が次から次へとピストルによって射殺される無惨な姿、また、市井の殺傷事件、中東或はベトナムの戦場に於ての罪なき兵また民衆の殺戮される悲惨な状況、国際的に弥漫せる無軌道な学生運動のデモ行進などを日々のテレビ、新聞で見るとき、心あるものは、ただ啞然として目を蔽わざるを得ないものである。これは余りにも獸的であり、余りにも動物的である。これらの悪魔的とも思える人間の形相に接するとき、上述のブラウニングの句と雖も、ただ古臭いとか、陳腐だとかといって、棄て去るに忍び得ないものがあると思うのである。これは人間の「進歩せる獸たるの段階」でないどころか、「神に近きもの」といった言葉などは到底口にし得ない浅しい人間の姿である。寡る人間が動物的、獸的な未開、野蛮の段階に逆戻りしたと思えるものである。勿論、われわれ人間も生物の一種である以上、ある程度の、否、大いに生物的生活、欲求も満足せらるべきものである。けれども、獸類とか、動物とかというものと全く同一の生活をしてよいとはいえないと思うのである。われわれはよく、われわれは単なる生物ではない、人間であるという。従って、他人から、君は単なる生物にすぎないとか、お前はただの動物だとかいわれると、それに対し、強い抵抗を感ずるものである。必ず激しく抗弁して、おれは単なる生物ではない、単なる動物では断じてない、これでも立派な人間だと声高らかに忿懣の情を洩すものである。人が、われわれは単なる生物ではない、立派な人間であるというからには、人間には、単なる生物以上の生活がなければならぬ。然らば、この単なる生物以上の生活をする人間、即ち立派な人間とはどんなことか。ブラウニングはいっている。

「肉体のみありて、心なく、
心あれども、それはただ、
腕、脚のみを働かす人ならば、
その人、獸にあらずして何なるか。」

“What is he but a brute
Whose flesh has soul to suit,
Whose spirit works lest arms and legs want play?”

ibid., st. 8.

と。これは、われわれが肉体のあるがままに、ただ手足を働かす存在であれば、それはただ客体的に存在するにすぎないことをわれわれに教えたものである。人間が人間であるといい得るには、人間は主体的な存在でなければならない。人間が主体的な存在、即ち、主体的に生きるところに、われわれは人間であるとか、われわれは立派な人間であるといえる根拠があるのである。人間が他の生物と異なる点とは、人間が主体的に生きる存在物であるということである。

われわれ人間は、自らが、またその身辺の人達が平穩のうちに無事な生活をしていると

きは、人間というもの、人間の存在、従って、また、人生というものに就ては何等考えるところなく、ただあるがままの肉体的生活、従って、また、単なる物質的な、機械的な生活、即ち客体的な存在としての生活のみをするものである。しかし、自らに、或はその身边の人達に何かの変化が起るとき、今迄の機械的な生活から一步踏み出し、客体的な存在から脱して、人間というもの、人間の存在、人生というものに対し、主体的な考えをもつようになるものである。例えば、地震が自らの住む地域でなしに、他の地域に起るとき、他人事として看過したものが、偶自らの住む地域にそれが起り、住む家が倒され、愛する身内のものを失うとき、はじめて地震の恐しさを知り、自然の威力に打たれ、人間の微力を悟りやがては人生のはかなさを歎じ、人生の無常を感じるに到るのである。この無常感は、人間が、人間というもの、人間の存在、従って人生というものに就て感ずる危機感であり、人間がこの危機感を覚えて、はじめて生の意識を実感するのである。生の意識とは人生の有限を意識することであるが故に、自らは、今、生きてはいるが、やがて亡びるということを切実に感じ、人間の生死の問題に無関心におれなくなるのである。人間の心情がこの域に達すると、今迄のような単なる客体的生活に満足し得なくなり、ここに主体的に生きようとするようになる。

人間がこのような人間となれば、自らの周囲を取り巻く人間が、人間の仮面を被りながらも、余りにも獸的な、余りにも動物的な客体としてのみの人間の行動をするのを目の当りに見ては、これらの人間は、どうして限りある身の人間なるに、また、これらの人間と雖も、古来幾多の哲人、文人によって、上述の主体的な生き方を教えられ、自なも亦、価値ある人生の営みに就くべきことを弁えいると思われるにかかわらず、尚且つこの行状なるは、いかなることかと、余りにも人間の浅しき、余りにも人間の醜さに、一時は極度の失望を覚え、異状な程の心の不安と動揺に巻き込まれるものである。そして一時は、人間の獸性が寡る人間の本質にあらざるかの疑惑の暗い幻影が身边に附纏うのである。けれどもこの幻影に附纏われ、煩悶を続けるうちにも、やがてこの幻影を越えた彼方に、或は幻影を突き貫けた遠くの暗黒の中に、一条の光線の閃くを覚えるのである。ここに人間は、その閃きの発する地点にこそ人間の本質といったものが潜んでいるのではないかと感じ、そこに向って突進し、そこに辿り着き、そこに人間の本質を突留めねばおかないとの情熱が沸き上り、ここに大悟一番、身边を取り巻く幻影を切りぬけ、乗り越えたい切なる希いを抱くに到るのである。不安の念、心の動揺が深く幻影の層の厚いものほど、この希いは一層強くなるものである。これは信仰に似てはいるが、信仰とは異なるもの、いわば、人間が人間の存在それ自身に就ての根源的なものを、以前にも増して、更に切実に求め、これに凭りかかり、これを援けとして、獸的でない、また、動物的でない人間の、真の人間の人間らしい姿を見出そうと懸命の努力をするものである。ここに、さきの無常感的に臆に人間の死の運命を意識せるものが、更に深く、強く、永遠とか、無限とかいうものを求めて行くようになるのである。このときの人間は、人間が生物として持っている人間の肉体及びその肉体より生ずる快樂とか、欲望とかを一時忘れ、只管に、また、切実に、無限、永遠を求める故に、生物的な人間を一時離れた人間となるのである。偉大な先哲、偉大な古人が深山幽谷に籠って修業に精進したのはこれなのである。このときの人間は動物性とか、獸性に含羞を感じてくるのである。人間にこの含羞の感が生じてはじめて、人間の本質、従って事物の本質を把握するに到るのである。これは、人間の内部に存在する永遠とか無限とかにつながる生命が、人間自らの求めている本質的な永遠とか無限とかの生命と

感応するのである。ここに有限な人間が、その内面に於て、本質的な無限とか、永遠につながる即ち久遠の生命につながり、自らがその一部をも荷っている、或はその一部をなしていることに気付くのである。ここに人間は主体的に自らの姿を発見し、主体的な人間のよろこびに浸るのである。このようなよろこびに浸っている人間をブラウニングは次のようにいっている。

「なんじ

人も獣も、等しく持てる
肉体よりいつる
単なる快樂を拒むことよきことなり。
われらの肉体に
生命の木の枝生じ、
われらのところに
生命の実結ぶ。」

“Thou dost well in rejecting mere comforts that spring
From the mere mortal life held in common by man and by brute:
In our flesh grows the branch of this life, in our soul it bears fruit.”

Robert Browning; Saul st. 8.

と。ここにブラウニングのいう「生命の木」「生命の実」が主体的な人間のよろこびである。このよろこびは人間の肉体より直接生ずるよろこびとは別のよろこびである。人間の肉体より生ずるよろこびは、また、人間が物質的なものより得るよろこびのことであり、或は人間が外面的な知識より得るよろこびでもある。この肉体より生ずるよろこび、物質より得るよろこび、知識より得るよろこびと、人間が肉体を一時忘れ、永遠、無限への憧れに生きることから生ずるよろこびの二つのよろこびが共に一つのルツボの中に入れられて、それらが昇華されたところに生ずる叡知の中に、人間の真のよろこびは存在するのである。叡知という言葉それ自体は、すぐれた知性という意味を持つものである。従って人間の一つの智慧を示すものではある。しかし、ここにいう叡知は単なる理知だけでなく、更にそれに、人間の根源的な生命にかかわるものを切に、また、強く求める人間の智慧が加わったものというべきである。わたくしはこれを生命感的智慧と呼びたいのである。この生命感的智慧に生きる人間のよろこびが真の人間のよろこびである。このよろこびに生きる人間が主体的に生きる人間の姿である。これこそ人間の真に人間らしい姿である。

(3) 生命感的智慧

人間が、ものを知ろうとする智慧のうち、自然科学、精神科学などの与えるもの、或は広くわれわれの悟性によって知り得るものを、わたくしは知識と呼びたいのである。この意味での知識の大部分は、人間が種々の科学を学ぶことによって、人間の生活、特に衣食住の生活に必要な事物、それも、その事物のただ外面だけを知るに役立つ知識にすぎないと思うのである。従って、この意味の知識は、主として、人間の物質生活の智慧を指すのである。人間の物質生活以外の精神生活、それも特に、感情生活に必要な、人間の心情、または、人間の心情の鏡に映る事物の内面の姿を知る智慧は科学によっては与えられなく、また、悟性によっては知られないと思うのである。これを与えるものは、それとは別の人間の智慧である。ブラウニングに次の僅か四行の短詩がある。

「岬廻れば、忽ち、海現われ、
太陽、山の端に見ゆ。
かれには、黄金の道、
われには、男の世の^{たす}授け。」

“Round the cape of a sudden came the sea,
And the sun looked over the mountain’s rim
And straight was a path of gold for him,
And the need of a world of men for me.”

Robert Browning; Parting at Morning

と。この詩の題名は「朝の別離」となっている。これをただ科学的或は悟性的、論理的な知識によってみれば、次のようになる。即ち、最初の二行は、岬を廻ると海が現われる、太陽が山の端に見える、といているにすぎなく思われるものである。朝の海の景色の描写としては、当然のことをいったにすぎない。後半の二行に到っては、かれには黄金の道が真直である、わたしには男の世の必要がある、というのである。われわれの悟性によってでは何のことか理解に苦むのである。ところが、これを、科学的或は論理的な知識以外の人間の別の智慧を通してみると、次のようになるのである。先づ「朝の別離」の題によって、逢瀬を楽しむ二人の男女が相会する場面であることが感じとられる。即ち二人の男女が、この会合をただの一瞬をも、互の生活の充実したものとなし、生命力の完全燃焼を望み、一瞬一刻をも惜んでいる別離の朝の情景ということが感じとられるのである。女は男を送り、二人は共に、露けき野を越え、道を廻り、遂に岬に出る。たちまち眼前に海現われ、旭光、山の端より海面を射し、水面に金波漂う。男はやがて旭光の金色に映える沈路を跡に、元気よく、真一文字に渡って行く。二人は共に亡びる人間である。いつ一方が死ぬかも知れぬ。或は、両者とも死ぬやも計られぬ。従っていつ逢瀬が再び訪れるかわからぬ男と女である。あとに残る女は淋しさに堪えられないのである。愛する男にこの世をかけた女である。この別れが最後の別れともなれば、こののち女はいかにして生きて行けようか。この男の慰め、この男の励しなくしては、とても生きられぬ女である。これを思えば、この女には、この一瞬は堪えようとして堪えられぬ悲しい別離の一瞬である。こういった哀調極りない人間の心情の溢れる一篇の短詩である。このような人間の心情は、人間が生死をかけた心情である。生死をかけた人間の心情であるが故に、この心情は人間がいつ亡びるかもしれないという人間の最も根本的な問題に無関心たり得ない人間の心情なのである。この人間の心情、即ち人間の生命の根源に触れている人間の心情、この心情に人間が達すること及びこの心情に達した人間の内心を知る智慧は、論理や科学的知識とは別な人間の智慧である。これが生命感的智慧なのである。

故に、生命感的智慧は、人間が、人間の存在を意識し、人間の生にかかわる根源的なものを知ろうとする智慧である。人間が主体的に生きるとき、人生の危機を意識し、危機意識から生の意識、従って人生の有限を感ずる。人間が人生の有限を感ずるとき、人間は有限のはかない存在ではあっても、人間自らも亦、宇宙の本質たる永遠の時の流れの一瞬、無限のひろがりの一点を占めて、有限でありながらも、内面的には無限につながり、また、束の間のはかない存在物ではあっても、同じく内面的には永遠につながる、という自覚を得、その結果、人間のよろこびと悲しみを永遠の相の下に置き、ここに永遠の生命のリズム、無限の生命の声なき声と語らいをなすという人間の根源的な感情に浸るものであ

る。(拙著「生命のリズム」第二編，第三章参照)

この状態を、わたくしは人間の生命感的智慧が働いたといたいのである。

人間は生命感的智慧を働かして、とくに生にかかわる根源的なもの、永遠とか、無限とか、事物の本質とかを感じとるのであるが、これはどこまでも感じとるのであって、理知とか知性によって知られるものではない。それは永遠、無限、本質といったものは、暗示的、象徴的にわれわれに示されるにすぎないからである。このことを最もよく示しているのが、ピー・ビー・シェリー〈P. B. Shelley〉の「雲雀に寄せて」の詩である。シェリーは、かれの求める本質的なものを、肉眼では、或は科学的な知識では、認め得ないところから、雲雀によって暗示され象徴されるものによって、それを把えたのであった。かれは、

「よくぞ来りし、快活の精、
汝、天空より、
天空の近くより、
天来の技巧もて、
みなぎしらべ
力漲る調にて
胸に溢れる感情を注き出す。
汝は鳥にはあらざりし。」

“Hail to thee, blithe Spirit
Bird thou never wert,
That from Heaven, or near it,
Pourest thy full heart
In profuse strains of unpremediated art.”

P. B. Shelley : To a Skylark, st. 1.

と。或はまた、

「沈める夕陽の金色に閃めく中に、
雲その上に燃えたつところ、
なれ
汝は、浮び、また、飛翔す。
朝の歌声はじめしときと
同じ疲れ知らざる歌声もちて
形体を離脱せる
束縛なきのよろこびのごと。
なれ
汝の姿見えず、
まわ
汝の飛翔の周りに融けゆく
白昼のありやなしやの星のごと。
されど、汝の鋭き声
よろこびの声聞ゆ。
暁の明星の冴えたる光
澄みたる白き空のさなかにおいて、
微少となりて、目にはとまらず、
ただあるを感ずるがごと。」

“In the golden lightning
Of the sunken sun
O'er which clouds are bright'ning,
Thou dost float and run;
Like an unbodied joy whose race is just begun.
The pale purple even
Melts around thy flight:
Like a star of Heaven,
In the broad daylight
Thou art unseen, but yet I hear thy shrill delight,
Keen as are the arrows
Of that silvere sphere,
Whose intense lamp narrows
In the white dawn clear
Until we hardly see——we feel that it is there.”

Ibid., st. 3—4.

と。また、シェリーは今日の人間に缺けているもの、今日の知識のみを偏重する人間、今日の物質のみに満足している人間には隠されているもの、ただ生命感的智慧を働かして、永遠を、無限を、本質を見ようとする人間の心の耳にのみ聞き得られるもの、それを、同じく雲雀にこと寄せて次のように歌うのである。

「祝婚の合唱も
凱旋の歌も
汝なれの声に比するとき
すべて空虚の高言にすぎざるなり。
祝婚の合唱も
凱旋の歌も
一つのもの
一つの缺けたるものの
隠されあるを感ずなり
汝の美わしの声
その源泉、果して、いかなるものなるか。
いかなる原野、はた、波なるか。
いかなる山岳、いかなる形の
天空なるか、はた、広野なるか。
同胞はらからに対するいかなる愛か、
苦悩に対するいかなる無知か。]

“Chorus Hymeneal,
Or triumphal chant,
Matched with thine would be all
But an empty vaunt,
A thing wherein we feel there is some hidden want.

What object are the fountains
Of thy happy strain?
What field or waves, or mountains?
What shapes of sky or plain?
What love of thine own kind? what ignorance of pain?"

Ibid., st. 14—15.

と。実に永遠、無限、本質といったものは、われわれの肉眼を以ては、或はわれわれの科学的知識を以てしては、その存在は見るを得ないものである。それは、われわれの生命感的智慧を以て、はじめて感じ得られるものである。

しかしながら、ここに注意すべきは、生命感的智慧は、人間が生得的にもっているということである。とはいっても、人間が、日常の物質生活、即ち客体的な存在としての人間生活に甘んじている間は、人間からは忘れ去られているものである。人間が主体的な存在として生きようとするとき、即ち人間が危機感を覚え、生の意識に目覚めるときにのみ、この智慧が、人間の心に現われるのである。故に、生命感的智慧は、根源的に、われわれの心のうちにあるといえるのである。即ち、科学的知識は、われわれが外から得るものであるに反し、生命感的智慧は、われわれが生得的に、内にもつものであって、時到来ば、それが外に漏れ出ずるものといえるのである。ブラウニングの劇「パラセルサス」〈Paracelsus〉の中で、主人公パラセルサスは、知識の征服、それも知識の世界的征服といった壮図を夢み、科学的知識のみを追求し、結局人生に失敗するのである。しかしパラセルサスも生得的には、その内心に生命感的智慧は持っていたのであった。ただかれは科学的知識に没頭するのあまりに、それを忘れ去ったにすぎなかったのである。けれども、かれは、その世界知識征服の途に上るに先き立って、次のようにいうのであった。

「真理（ここでは生命感的智慧のこと）はわれらの心のうちにあり。

われら、心の外なるものを、いかに信ずとも。

真理はわれらの心の深奥にありて

充溢せるものなり。

われらの外なる卑しき肉体

壁また壁を築きて、これを囲む。

また、この肉体、

われらを迷わし、邪道に導く

肉欲の網を張る。

これら肉体の

意図を挫き終らせ、

その障害を貫きて、

完全に、明瞭に

生命を認める力

これ真理なり。

知るとは、

われらのうちに閉ぢ籠る

心の光彩を洩れ出だすべき

道を開くことにあり、

外にありと思わる
光を呼び入れしむるにあらざるなり。」

“Truth is within ourselves; it takes no rise
From outward things, what'er you may believe.
There is an inmost centre in us all,
Where truth abides in fulness; and around,
Wall upon wall, the gross flesh hems it in,
This perfect, clear perception—which is truth.
A baffling and perverting carnal mesh
Binds it, and makes all error: and to know
Rather consists in opening out a way
Whence the imprisoned splendor may escape,
Than in effecting entry for a light
Supposed to be without.”

Robert Browning: Paracelsus, Scene I, ll. 726—737.

と。これは生命感的智慧を人間が生得的にもっていることを示すものである。

(4) 缺けたるは——何

われわれの社会の理想的なものは、人間の知性と感情の調和のとれた社会である。哲学、宗教、文学、科学のそれぞれの分野がばらばらに存在するのでなく、それらが互にまざり合い、融けあった調和のとれた社会が理想的な社会といえるのである。しかるに現代は科学の与える知識が中心となった社会である。科学の与える知識の周囲に他の分野が小さく、ばらばらに散在するにすぎない。科学の与える知識は事物の外面を知ろうとする知識である。事物の内面を知ろうとし、また、内面を問題にするもの、即ち哲学、宗教は、今日では、社会の中心から離れた附随的存在に墮している。文学もまた、哲学、宗教と同じ状態に墮していると思えるのである。人間の内面生活、特に感情生活を問題としながら、外面的な知識を与える科学の周辺にうようよしている感がするのである。私見を以てすれば、文学というものの根本的なものは、人間の内面生活、それも人間存在の根源的な生の意識を基盤とする哀愁の美の表現と想うのである。（拙著「生命のリズム」第二編、第三章参照、或は、拙著「久遠の生命」第二編、第一章参照）

従って、前述の生命感的智慧を働かして生の根源に触れるものが真の文学と思うのである。しかるに、今日多くの文学は、人間存在の根源まで深く探ることをせず、人間の心、人間の内面を問題としながらも、ただ皮相的な内面描写に終り、深く人間存在の根源、生の意識にまで掘りさげることがないのが現状ではないか。これがため、即ち人間存在の根源があやふやな状態に放任されたままであるため、人間の不安は少しも解決されず所謂現代の不安時代が現出しているのである。ティ・エス・エリオット〈T. S. Eliot〉はこの状態を次のように歌っている。

「此処は水なくて岩ばかり。
岩のみありて、水はなく、
ただあるものは砂の道。
その砂道は、うねり上りて山中へ、

その山中も、水なくて岩の山。
水あれば、止まりて、それを飲みもせん。
岩ばかりでは、立ちどまり、
物思うこともなし難し。
汗、乾き、足、砂に埋まりてあり。
岩の中、水さえあれば、と、
せつなる思い。
唾吐くこともなし得ぬ
死山の虫歯の口。
此処にては、立つこと、横わること、
腰掛けること、すべて不可。
山中は静けささえもあり得なく、
ただ、雨降らずして溷す
不毛の雷鳴るばかり。
山中は孤独を楽しむこともなし得ず
ひびわれた泥の家より、
赤きすね顔、冷笑し、歯むきだすのみ。』

“Here is no water but only rock
Rock and no water and the sandy road
The road winding above among the mountains
Which are mountains of rock without water
If there were water we should stop and drink
Amongst the rock one cannot stop or think
Sweat is dry and feet are in the sand
If there were only water amongst the rock
Dead mountain mouth of carious teeth that cannot spit
Here one can neither stand nor lie nor sit
There is not even silence in the mountains
But dry sterile thunder without rain
But red sullen faces sneer and snarl
From doors of mud cracked houses,

T. S. Eliot: The Waste Land, V. What the Thunder Said.

と。これは現代の人々の不安の幻影を如実に示していると思われる。実に、今日、われわれの目前に往来する現実世界は、余りにも外面的人間生活でありすぎる。しかもそれは、およそ人間的なものでなく、寡ろ悪魔的とも称すべきものばかりである。これらのものは、われわれ人間の内面生活の追求より生ずる理想とか、夢とかの壁を打碎き、われわれを絶望の境地に追い込んでしまったのである。それは、われわれが、最初内面生活の追求から、われわれの内面に、憧れとして持っていた幸福の理想とか、仕合せの夢とかを、近代に到って、外面的知識の援けによって、これを現実世界に実現し、以て、人間の内面及び外面の両面の調和ある理想世界を実現しようとしたのであった。しかるに、この意図のために、自らが学びとった科学、その科学が生み出した文明そのものが、人間が内面的に

もっていた人間の幸福の理想とか、仕合せの夢どころか、それとは全く反対の不幸な、災の多い悪夢と化し、冷い暗い幻影に附纏われるに到ったのである。かくして、人間が内面生活の追求より憧れた理想社会実現のために採用しようとした外面的知識が、人間の内面生活追求の夢をどこかへ押しやっしまい、それに代って、外面的知識のみの現代社会をでっち上げてしまったのである。そしてこの社会の要員である人間のひとりびとりを、その社会機構の無機的な、物質的な、単なる一部分品と化してしまつたのである。これは結果に於ては、人間ひとりびとりが持っている尊い有機的な内面的な、生命感的智慧を抑圧し、奪い去ることとなつたのである。そして、この無機的社会機構の残忍性の犠牲となり、現代人の多くは、いわば、清酒からその芳醇な香りを搾り取られた酒の糟となつているのである。これは、人間が科学の与える知識のみによって幸福を夢みるとき、その結果は、完全な人間らしい生活の不可能なことを示すのである。しかしながら、人間が社会機構によって、無機化され、科学的知識によって、目かくしされ、事物をただ、功利的に、外面的にしか見られないようにされたこの壁を打ち破り、この壁によって隠されている人間の、また、事物の内面的なもの、生命的なもの、即ち本質を把握するように人間の目を開いてくれるものは、人間が生得的にもっている生命感的智慧を目覚ますより外に道はないと思うのである。今日、われわれにとって最も必要なことは生命感的智慧を取りもどし、これを働かすことによって、今日の間から忘れられ、失われたかに思える真の人間認識、真の人間本質追求の情念を回復することでなければならない。ブラウニングはいつている。

「缺けたるは——何。

薫風里を渡り

新緑山に満つ

天地の汚点——いつこぞや。

光は宇宙に弥漫す。されど空虚の感

額縁ありて画なきを如何せん。

樹に簇葉あり、花に色彩あれど生色なく

薔薇いたづらに咲きて樹蔭の蔽うなし。

高きより降り来る宏大無辺の力

人の世の不備を完からしめたまえ

紺碧の夏の喘ぎを救いたまえ

天上の無垢の白薔薇

その一息吹

万物は蘇り

生に息つき

愛に浸たさる。」 (拙著「久遠の生命」の扉に示せるもの)

“Wanting is——what?

Summer redundant

Blueness abundant

——Where is the blot?

Beamy the world, yet a blank all the same,

——Framework which waits for a picture to frame:

What of the leafage, what of the flower?
Roses embowering with naught they embower!
Come then, complete incompleteness O come,
Pant through the blueness perfect the summer!
Breathe but one breath
Rosy-beauty above
And all that was death
Grows life, grows love,
Grows love!"

Robert Browning: Jocoseria Prologue

と。これは、新緑に蔽われ、また、若葉群る初夏の山の風景も、ただ漠然と眺めただけでは、ただ山の形骸を見るのみである。しかし、われわれが生命感的智慧によってこれを見れば、事物の形骸の内面に、生命の息吹きが感ぜられることを示したのである。実に、新緑に蔽われ、若葉群るかに見える今日の社会もただ知識だけで見るときは、社会の形骸のみを見ているにすぎなく、心あるものは堪え難い淋しさ、心細さを覚えるものである。けれども、われわれが生命感的智慧を働かすときには、そこに、われわれの眼に、生命に満ちた万象が映じ、万物に神韻宿り、生命の躍動生気の活動を覚えるのである。

(5) 宇宙の本質と浪漫派詩人

シェリーは雲雀にこと寄せて宇宙の本質に触れ次のように歌っている。

「^{なれ}汝の澄みたる烈しき喜悦は、
倦怠と共に存することあらじ。
苦悩の影一つだに
汝に近寄ることなからん。
汝は愛を知るも
愛の悲しみの飽満を知らず。
汝は覚めいるときも
眠れるときも、
亡びゆく人間の^{ひと}夢想より
はるかに真実、深遠の思いを
死に就き致すなり。
さにあらずして、いかにして、
汝の歌声、かく澄みて
流れ出づることあらん。
人間は過去を省み
未来を思う。はた
有り得ざることに
思い患う。
人間、^{ひと}偽ならぬ
真実の笑にも
悩みを充たす。

ひと
人間、その声、
いと美わしきときだに、
いと悲しき思いを語る。
人間、もし、憎しみ、誇り
恐怖をば、^{さげ}蔑すむ如き
非情のものであるならば、
人間、もし、涙を流すこともなき、
無感のものに生れ来るものならば、
人間、いかにして、
汝の喜悦に、
近づくこと有り得べき。
汝、浮世の非情の人間を
^{さげ}蔑すむものよ、
汝の歌声、
その流れでるその術こそは、
詩人にとりて
楽しき調べの
すべての韻律、
はた、^{ふみ}書物にみらるる
すべての宝を
はるかに凌ぐものならん。
人間に教えよ、
汝の頭脳の知れる
よろこびの半ばを。
汝の唇より出づる。
狂ほしきよろこびを。
さらば、世の人、
耳傾けん。
今、われ、われの耳を
傾ける如くに。」

“With thy clear keen joyance
Languor cannot be:
Shadow of annoyance
Never came near thee:
Thou lovest—but ne'er knew love's sad satiety.
Waking or asleep,
Thou of death must deem
Things more true and deep
Than we mortals dream,
Or how could thy notes flow in such a crystal stream?
We look before and after,

And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.
Yet if we could scorn
Hate, and pride and fear;
If we were things born
Not to shed a tear,
I know not how thy joy we ever should come near.
Better than all measures
Of delightful sound,
Better than all treasures
That in books are found,
Thy skill to poet were, thou scorner of the ground!
Teach me half the gladness
That thy brain must know,
Such harmonious madness
From my lips would flow
The world should listen then — as I am listening now.”

P. B. Shelley: To a Skylark, st. 16—21.

と。ジョン・キーツ<John Keats>も亦言っている。

「幸福は何処いずこにありや。
われ、平常の心を、
神聖との交流へとさしまね磨くところにこそ。
本質と一体となるところにこそ、
幸福はあるなり。
そこに在りては、ついに、
わられ、充分の変質を遂げ、
時空の束縛脱し、
光り輝くなり。」

“Wherein lies happiness? In that which beck
Our ready minds to fellowship divine,
A fellowship with essence; till we shine,
Full alchemiz'd, and free of space.”

John Keats: Endymion, Book I, ll. 777—780.

と。実に人間の幸福は、生命感的智慧を働かして、知識の束縛を脱し、ここといまの暴虐に打ち勝ち、神聖との交流、本質と一体となる所にある。永遠の流れの一瞬、無限のひろがりの一点を占める人間は、この一瞬、一点は掛替のない尊いものなるが故に、夢おろそかにはすべきではないが、この枠の中の微少の知識、物質に、蝸牛角上の争に狂奔することなく、一瞬一点の現実を確実に把握し、しっかりと現実に足を踏みつけながら、生命感的智慧を働かして、永遠の生命につながり、無限の生命の中にあることを自覚することこ

そ、人間の喜であり、幸福である。ウィリヤム・ウァーズワス <William Wordsworth>
もワイ<Wye>川のほとりの大自然の前に立ち、

「あの幸福しあわせの気分。

そこにありては、

神秘の重荷も、

不可解な、この世の

痛ましき重圧も、

軽減されるものなり。

あの静謐の幸福の気分。

そこにありては、

愛情やさしく、

われらを導き、

この肉体の呼吸、

血液の循環も、

一時とどまり、

われら、肉体に於て、

眠り横たわり、

ただ魂のみに生きるなり。

われら、ここに

われらの眼、

調和の力と、

深き喜よろこび悦の力によりて

静められたる、

万象の生命を

みぬく洞察なり。」

“that blessed mood,

In which the burthen of the mystery,

In which the heavy and the weary weight

Of all this unintelligible world,

Is lightened: — that serene and blessed mood,

In which the affections gently lead us, on —

Until, the breath of this corporeal frame

And even the motion of our human blood

Almost suspended, we are laid asleep

In body, and become a living soul:

While with an eye made quiet by the power

Of harmony, and the deep power of joy,

We see into the life of things”

William Wordsworth: Lines Composed a Few Miles

above Tintern Abbey, II, 37—49.

と書いてい。かくして、われらが本質と一体となり、本質に融け込むとき、次のキーツの

言葉が示す如く、本質の神秘に触れ、永遠の囁きを聞き得られるのである。即ち

「おお、おん身、おん身の
偉大な神殿の屋根、
裂けし老樹の幹より垂れ下り、
永遠の囁き、幽暗を、
また、人知れず咲く花の
生れ、生長、消えゆくさまを、
重くかかる静寂につつまなり。」

“O Thou, whose mighty palace roof doth hang
From jagged trunks, and overshadoweth
Eternal whispers, glooms, the birth, life, death
Of unseen flowers in heavy peacefulness;”

John Keats: Endymion, Book I, ll. 232—235.

と。キーツは山上の牧羊神パン<Pan>の前に立ち、永遠の囁きを聞くと同時に、また、

「普遍の知識に到る
神秘の扉の
畏敬に堪えざる
開門者。」

“Dread opener of the mysterious doors
Leading to universal knowledge”

Ibid., ll. 288—289.

と、神秘の扉にも触れるのであった。キーツはこのとき、今迄、科学的な諸々の知識に悩むかれの脳髓、科学的知識によって、乾枯びていたかれの魂が、どこかえ押しやられ、ここに新生の思いと、精気を与える広大無辺の生命が、かれの心に満ち溢れるに到ったのである。そして、そのときのかれの心の囁音が、微妙にして深遠な次の句となったのである。

「孤独のうちに悩む諸々の思いのための、
想像を絶する憩の場所と常になれかし。
天のいや果てまで思想を追いつめ、
やがて、脳髓をむき出しのままに残すに
到る思いの憩の場所に、
このもの憂き土塊のごろごと
ひろがりゆく地に、
常に精気を与え、
新生を与える
酵母となれかし。
常に広大無辺の象徴となれかし。
或はまた、大海に映る天津み空、
或はこの両者の間を満たす大気、
或は不可知のもの、
否、これ以上いうの要なきものとなれかし。」

“Be still the unimaginable lodge
For solitary thinkings; such as dodge
Conception to the very bourne of heaven
Then leave the naked brain: be still the leaven,
That spreading in this dull and clodded earth
Gives it a touch ethereal — a new birth:
Be still a symbol of immensity;
A firmament reflected in a sea;
An element filling the space between;
An unknown — but no more;”

Ibid., II, 293—302.

と。シェリー、キーツ或はワーズワスの如き詩人たらざるわれわれと雖も、知識によって雁字搦に縛られた現実の虚しさに、飄然として家を跡にし、山野に遥うとき、われらの内心の生命感的智慧の働きによって、たとえ一瞬ではあっても、われらの最も美しい心の状態に置かれ、理窟では説明しがたい、ましてや、論理や、科学的知識では把え難い高邁ともいうべき心情に置かれるのである。このとき、われわれの眼は思わず、山の姿に崇高さ、青く深き水の漂う湖に深遠を感じ、また澄みきった月、煌く星、牧場を走る無心の小羊、木の枝に囀る小鳥、日の光に映える香ばしの草花に喜を覚え、ここに自然の神秘に触れ、一面また、厳粛な、ひきしまった心情となり、目には見えず、耳に聞えずありながら、何か知らねど偉大なものの存在するを感じるに到るのである。そして、これがやがて、祝福された気持、朗らかな気分へ蔽われ、ここに豁然として救われた境地に達するのである。このわれわれの心境を情緒豊かに歌ってくれたのがワーズワスの次の詩である。

「さらば歌え、なんじら鳥よ、
歌え、歌え、喜の歌を。
鼓の調べに合せてのごとく、
小羊をして躍らしめよ。
われら心において、
なんじらの群に加わらん。
なんじら笛吹くものよ、
なんじら、今日、全心全霊もて、
五月の喜を感じずるものよ、
曾て輝かかりし光、今、
わが眼より永久に消え行くとも、
草に光輝、花に栄光ありし
幼き頃を取り戻すこと得ざるとするも、
われら悲しまず、
寧ろあとに残れるものに
われ力を見出さん。
曾てあり、また、未来にも、
永久にわたりて、
人の心の根底に、

自然に沸くの同情に、
人の苦悶より、ほどばしり出る。
人の心を和げる思いのうちに、
死を通して、永遠を見るの信仰に、
悟りの心もたらず歳月のうちに
われ力を見出さん。
おお、なんじら、
泉よ、牧場よ、丘よ、森よ、
われら互の愛の裂かるるを予言する勿れ、
われら、尚も、わが心のうちに、
なんじらの力を感じず。
われ、曾ての幻の喜を捨て
なんじの不易の權威の下に生きたし。
われ河床を波立ち流るる
なんじ小川を愛す、
なんじの軽き流れの如く軽ろらかに
山野を歩きし幼き日にもまして。
新しく生れ出でたる
なんじ太陽の
無垢の輝きに 愛を感じず。
落日のあたりに漂う、なんじら雲よ、
人の世の果敢^{はか}なさ知れるものの眼に
なんじの彩色^{いろ}は沈静をもたらずなり。
われ、一つの人生試練を経、
ここに沈静の賞牌を得たり。
これ、われの頼れる人心
その優しさ、その喜の
はた、その恐怖の賜物ならん。
ここに到りて、われにとり、
ただ咲く、いやしの花だに
涙流すに、あまりに深き思いあるなり。」

“Then sing, ye Birds sing, sing a joyous song
And let the young Lambs bound
As to the tabors sound!
We in thought will join your throng,
Ye that pine and ye that play,
Ye that through your hearts today
Feel the gladness of the May!
What though the radiance which was once so bright
Be now for ever taken my sight,
Though nothing can bring back the hour

Of splendor in the grass, of glory in the flower!
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be
In the soothing thought that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.
And O, ye Fountains, Meadows, Hills, and Groves,
Forebode not any severing of our loves!
Yet in my heart of hearts I feel your might;
I only have relinquished one delight
To live beneath your more habitual sway.
I love the Brooks which down their channels fret,
Even more than when I tripped lightly as they;
The innocent brightness of a new-born Day
Is lovely yet;
The clouds that gather round the setting sun
Do take a sober colouring from an eye
That hath kept watch o'er man's mortality;
Another race hath been, and other palms are won.
Thanks to the human heart by which we live,
Thanks to its tenderness, its joys, and fears!
To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears."

ibid., Intimations of Immortality from

Recollections of Early Childhood, st. 10—11.

(6) 結 び

かくして、シェリー、ワーズワス、キーツ等のイギリス浪漫派の詩人が生命感的智慧を働かして、本質と一体となり、神秘の扉を開き、単なる知識の束縛を脱し、永遠の囁きを聞き、われわれに叡知の世界を知らせて、人間の真の喜と幸福を示してくれたことが理解されると思う。実に、今日の社会の缺けるものの最大なるものは知識の偏重にすぎ、真の人間性を軽視しているところにあると思う。知識は外から、人間の心に入り来るものたるため、これが整理され、公式化されればされる程、一層たやすく人間の心に入り易いものである。しかしこれを受け入れる人間そのものに、それを受け入れる体制ができていなければ、知識のみが人間の主体となり、人間そのものが何処かへ押しやられ、廂を貸して母屋を取られる恰好となる。人間疎外とはこのことをいうのである。人間が人間の本質を忘れずありながら、知識を取り入れてこそ、はじめて真の人間となり、人間喪失とはならないのである。人間が人間の本質を忘れずに、それを保持するのは、人間が生得的に、その

内心に持っている生命感的智慧を働かし、真の人間の経験を積み、主体的に人間の本質に目覚め、更にそれを生長させつつ知識を取り入れ、それを叡知にまで昇華させるところに人間の喜と幸福がある。